

Title	「日本の幻想」から「幻想の世界」へ：高度成長期における宝塚「春の博覧会」シリーズ
Author(s)	金, 蘊灵
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2024, 10, p. 17-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98140
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「日本の幻想」から「幻想の世界」へ —高度成長期における宝塚「春の博覧会」シリーズ—

アート・メディア論 博士前期課程 2年

金 蘊灵

1、はじめに

宝塚歌劇の110年の歴史を大きく捉えれば、1974年の『ベルサイユのばら』以前と以降と分けられる。「バルばらブーム」以前、宝塚は「国民文化」としての位置を目指してきた。それ以降になると、今日的なポップカルチャー、また「特殊な世界」¹としての宝塚像が次第に定着する。多くの宝塚研究は、こうした1974年を境とする二つの宝塚を繋げることに取り組んだ。²しかし、50年代後半から70年代半ばまで——すなわち日本の高度成長期——への注目は相対的に少ない。宝塚が、どのように「国民文化」から「特殊な世界」へと変容していったのか、解明する課題が残っている。

上記の課題を踏まえ、本発表は、高度成長期に宝塚ファミリーランドで開催されていた「春の博覧会」シリーズを取り上げる。1954年から1975年の間、宝塚の機関誌『歌劇』に掲載された広告や記事を中心に、出品目録や公式アルバムも参照した上、博覧会の主題や仕組みの変遷を考察する。さらに、博覧会の変遷から、宝塚全体の変容と、高度成長期にわたって密かに成長した日本の消費社会についても考えたい。

2、宝塚と博覧会

まず、本発表で扱う「宝塚」という語の射程について説明しておく。ここで述べる宝塚は、宝塚歌劇・宝塚ファミリーランドを含む総合的娯楽産業を指す。「総合産業」という視点でなされた宝塚研究は数ある。³これらの先行研究に、小林一三の鉄道・娯楽事業の全体像における宝塚ファミリーランド⁴の位置付けが明らかにされている。空間で捉えれば、ファミリーランドは、宝塚歌劇の外部環境をなす。また、機能面を見ると、名称の通り、初期から家族で余暇を楽しむための場所として建設されてきた。

次に、宝塚では、大正期から様々な博覧会が開催されていた、という事実に注目したい。宝塚歌劇の歴史を辿ると、その最初の公演は、1914年に宝塚で開催された「婚礼博覧会」の余興であった。この年だけでなく、1911年から1916年の間、新聞

¹ 渡辺裕『宝塚歌劇の変容と日本近代』新書館、1999年。

² 注1の他、川崎賢子『宝塚—消費社会のスペクタクル』（講談社、1999年）、ジェニファー・ロバートソン『踊る帝国主義—宝塚をめぐるセクシュアルポリティクスと大衆文化』（堀千恵子訳、現代書館、2000年）などが挙げられる。

³ 津金澤聰廣『宝塚戦略—小林一三の生活文化論』（講談社、1991年）、伊井春樹『小林一三は宝塚少女歌劇にどのような夢を託したのか』（ミネルヴァ書房、2017年）など。

⁴ 1960年以前には「宝塚新温泉」と称されていた。

社主催による複数の博覧会がある。⁵その中の多くは、女性と子供に主眼をおき、女性と子供向けの商品の宣伝になっている。これらの博覧会が反映するのは、「消費者」としての女性と子供⁶の登場であった。そして、宝塚は、こうした博覧会のコンセプトと連続し、「未熟さ」のイメージを打ち出し、家庭本位の戦略⁷を展開していった。

上記のように、初期の宝塚には、「消費の場」と「家庭の場」という二つの性格が現れていた。この二つの性格を念頭に置き、以下、博覧会の状況を見ていく。

3、「春の博覧会」シリーズ

宝塚の戦後における最初の博覧会は、1951年の「子ども博」であった。そして、1954年に、「日本芸能博」が開催された。この二つ博覧会は、記念開催であることと、新聞社主催、そして4月1日から5月31日を会期にするという三点において共通である。こうした記念開催から発足した博覧会は、1955年以降に恒例化した。『歌劇』には、1954年を皮切りに、博覧会の広告が打ち出されていた。また、1954年から1975年までには、博覧会の「見物記」も掲載されていた。これらの資料から、博覧会の開催は1988年まで続いたと確認される。会期は、3月下旬から6月上旬の期間中で一貫している。また、新聞社主催という点も、少数の例外を除けば変わりはない。⁸

本発表は、上記の博覧会シリーズの、1954年から1975年までの変遷を考察する。大よそ1965年を境に、変質が見られる。以下、三つの視点で見ていく。

一つ目は博覧会と宝塚歌劇のタイアップ。1955年から1965年の間、宝塚歌劇の四月公演のポスターには、同時期に開催されている博覧会のタイトルが、公演の「協賛」として記されている。その上、作品の主題や内容には、博覧会を意識した部分も認められる。こうした協賛関係は、1966年以降になくなる。

二つ目は規模の変化。1965年以前の博覧会は、宝塚ファミリーランド内の複数の施設で展開されていた。1971年以降になると、規模が縮小し、主に動植物園に集中する。1966年から1970年の五年間には、催し物の性格自体は曖昧だった。1966年と1969年は以前通りの博覧会形式だったが、1967年、1968年、1970年の催し物は、厳密にいうと博覧会ではない。その三年、『歌劇』上の見物記に紹介されたのは、ファミリーランド内の新施設や、会期中に限定されていたアトラクションであった。⁹

三つ目は展示内容。1965年以前の博覧会には、日本の民俗・歴史・伝統をめぐる展示内容が多かった。それに対し、1966年からは、博覧会に、「日本」にまつわる現実性が急遽薄くなる。一方、日本以外の地域、すなわち「世界」を主題にする博覧会に

⁵ 津金澤聰廣『宝塚戦略—小林一三の生活文化論』吉川弘文館、2018年、38頁。

⁶ 川崎賢子『宝塚』、39頁。

⁷ 周東美材『「未熟さ」の系譜—宝塚からジャニーズまで』新潮社、2022年、72頁。

⁸ 1967年と1968年に、新聞社主催の博覧会はなかった。詳細は本文で後述する。

⁹ 1970年、例年の「春の博覧会」と同じ期間に、読売新聞社主催の「日本茶花道展」がある。しかし、見物記はこの展覧会の内容を取り上げていない。

も、変化が現れる。例えば、1962年の「太平洋博」と1969年の「シルクロード」と比較すると、内容からもコンセプトからも差異が捉えられる。広告に注目すれば、前者が「自然」と「民族」¹⁰を打ち出すことに対し、後者は、「冒険」と「ロマン」¹¹をキーワードにする。そして、「シルクロード」以降の博覧会には、こうした現実にある「世界」も現れなくなり、代わりに登場したのは、「恐竜」や「超人」などであった。

4、博覧会にみる宝塚の変容

上記のような博覧会の変化はいかに捉えるべきだろうか。また、宝塚の変容とどのように関連し合うのか。まずは、同時期の博覧会にまつわる二つの文脈を見てみる。

一つ目は、1950年の「神戸博」¹²である。同時期開催の「アメリカ博」¹³におけるアメリカ像に対し、神戸博は活気に満ちた日本像を打ち出している。そして、神戸博は日本初のテーマ展開方式による博覧会でもあった。¹⁴神戸博に現れている「生産」「交通」などのテーマは、宝塚の1965年までの博覧会にも頻繁に取り上げられていた。一方、神戸博では、日本の民俗や伝統に関わる催し物が数々展開されていた。¹⁵前節で述べたように、民俗と伝統は宝塚の博覧会でしきりに主題にされていた。こうみると、宝塚の博覧会は、神戸博と似たような「日本の幻想」を生産するものと捉えられる。

二つ目は、万博に関連する潮流である。戦後の万博の流れを参照すると、1958年から1970年までの万博には、人類全体を対象にし、抽象的な概念を可視化する傾向がある。¹⁶「人類の進歩と調和」を可視化する大阪万博と、「日本」を可視化する1965年以前の宝塚の博覧会とは、確かに理念上の類似性が見られる。一方、大阪万博は、日本で数十年続いた博覧会ブームを引き起こした。¹⁷こうした背景において、地方博の比較的に頻繁な開催、また、「博覧会のイメージの超大化」が、宝塚の博覧会に影響を与えた。すなわち、規模の縮小と回数の増加であった。¹⁸

上記に照らし整理すれば、宝塚の博覧会の変遷が明らかになる。主に三段階に分けられる。①1965年以前の、「日本の幻想」を可視化する博覧会。②1966年から1970年までの、博覧会の形が曖昧だった時期。③1971年以降の、小型化する博覧会。こうし

¹⁰ 「太平洋博」『歌劇』438、宝塚歌劇団出版部、1962年3月、117頁。

¹¹ 「シルクロード」『歌劇』522、宝塚歌劇団出版部、1969年3月、79頁。

¹² 1950年3月15日から6月15日まで、神戸で開催された。

¹³ 1950年3月18日から6月11日まで、西宮で開催された。

¹⁴ 津金澤聰廣「朝日新聞社の『アメリカ博覧会』」津金澤聰廣編『戦後日本のメディア・イベント [1945—1960年]』世界思想社、2002年、183頁。

¹⁵ 福間良明監修・解説『戦後博覧会資料集成 第6巻 日本貿易産業博覧会“神戸博”会誌神戸博』ゆまに書房、2020年、242-246頁。

¹⁶ 市川文彦「近代博から現代博への運営システム転換 1851～2017—褒賞制・売却制・展示法に映った〈世界〉」佐野真由子編『万博学—万国博覧会という世界を把握する方法』思文閣出版、2020年、515頁。

¹⁷ 吉見俊哉『万博と戦後日本』講談社、2011年、43頁。

¹⁸ 1970年以降、「春の博覧会」の他、夏と秋の固定の時期にも小型の博覧会が開催されていた。名称から見ると、春の博覧会と似たテーマとコンセプトをとっている。宝塚市史編集専門委員編『宝塚市史 第8巻』宝塚市、1981年、219-221頁。

た軌跡を把握した上、②の時期をめぐって見ていく。

②の時期に、宝塚ファミリーランドは遊園地としての機能を発展させた。ファミリーランドにおける遊園地建設は、1952年から展開されたが、大きく進んだのは60年代である。60年代に入ってから、宝塚は、各地における新型遊園地開発の潮流¹⁹を追い、新施設の導入を進めた。その成果として、1966年パノラマカー、1967年大人形館、1970年立体動物園などが次々に公開された。²⁰この頃の「博覧会見物記」が主にファミリーランドの施設の紹介となっていた理由は、ここにある。

さらに、宝塚ファミリーランドの遊園地化は、宝塚全体の変容と一環として捉えられる。1965年以前、ファミリーランドと宝塚歌劇は比較的に密接な連携を持っていた。前節で述べた、博覧会と歌劇演目の連動がその一例である。また、1962年までの博覧会広告に見られるファミリーランドの俯瞰図や、宝塚歌劇の50年代後半・60年代前半のいくつかの作品からも、ファミリーランドと歌劇の連携が確認される。要するに、ファミリーランドと歌劇とは、同じ方向を向き、世界観を共有していた。1965年以降のファミリーランドの遊園地化は、こうした共有の世界観の動揺を反映する。実際、60年代初頭に、ファミリーランドと歌劇の客層はすでにずれている。すなわち、歌劇には若い女性客が多く²¹、かつての家族本位の路線からはや逸脱している。こうした事実を参照すると、ファミリーランドの遊園地化は、宝塚が家庭本位の路線を貫くために、家庭層を取り込む機能を強化させた結果と見られる。

上記のような形で、「家庭の場」としての宝塚は、2003年ファミリーランド閉園まで保たれていた。一方、「消費の場」としての宝塚は、1965年を境に複数化し拡大していった。ファミリーランドと歌劇が分離し、各自が「幻想の世界」となっていく。

5、むすびにかえて

宝塚の博覧会が変容する1965年頃に、万博も変容する。吉見俊哉の論考によると、1964・65年のニューヨーク万博が、資本主義の作る世界像の変容を示している。いわば、博覧会的な世界像から、ディズニーランドが象徴するテーマパーク的な世界像へと変わっていくのである。²²宝塚ファミリーランドに、1967年登場した大人形館は、まさにディズニーランド的な、ファンタジーの世界である。そして、1974年の『ベルサイユのばら』以降、宝塚歌劇も、現実から離れた「特殊な世界」になっていく。かつて「日本の幻想」を作り出していた宝塚は、こうして「幻想の世界」へと転じたのである。宝塚の変容からは、高度成長期を経て、80年代に本格的に到来する日本の消費社会の予感がとられるのではないかと、最終的に思われる。

¹⁹ 橋爪紳也『日本の遊園地』講談社、2000年、147-160頁参照。

²⁰ 「宝塚ファミリーランドの歴史」『京阪神文学 宝塚ファミリーランド特集号』京阪神文学会、2010年4月、65-67頁。

²¹ 朝日新聞出版編『宝塚歌劇 華麗なる100年』朝日新聞出版、2014年、79頁参照。

²² 吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代』中央公論社、1992年、256頁。